



偉人の學校時代(二)

ウエルリントン公 米 溪

著名の軍略家、アーサー、ウエスレーは、紀元千七百六十九年、ダブリンより大約二十哩なる、トリムのダンガン城に於て生まる、而して、此は又、ナポレオン、ボナパルト及びキューペーを世に傳達せし年なり。

此の城今は、回録の災に罹りて、殆んど破壊せるを、公の生れたる室は、其の時迄尙指摘し得べかりき。此の地、ウエルリントン公の名譽を記述せる、ユリンス風の圓柱と、此の英傑の銅像の聳峙せる綠林よりは、僅少の距離に在り。

モーニングトンの伯爵及び其の夫人、乃ち此の、幼アーサーの両親は、早く、公をトリムの小學校に入學せしめぬ、時に年未だ幼なりしか、十歳にして、チエルシアの牧師、ウヰリアム、ゴワアの監督の下に置かれき。

公は虚弱にして、成長するに毫も變化なく、折々の疾病は、倦怠と不注意の狀をなさしむることも屢にて、又時々、重患に陥ることもありしかば其のきまつも、同年の他の兒童と比すべくもあらず。其遊戯場に入出入することも極めて、稀にして

偶々室を出て、此の場に入るも、常に外套を纏ひ、場の中央なる大なる、胡桃樹に瀝り憩ひて、周圍に戯むる、學友の狀を注視するのみなるが、若し、其の舉動に不法のことあるや、彼は常に、其の戯の關係者に警告を與ふるを常とせり。而して、反則者の逐はるゝに際しては、アーサーをして、其の缺を補はしめんとは、共に望む所なるを何者も、遂に之を取てせしむること能はず。若し五六の衆を擁して迫するに當りては、彼は非常の勇氣と決心を以て戦ひ、其の掌裡を脱せずんば、止まず、而して、一旦奔逸するや、再び彼の樹下に歸り、靜かに、平然として、慎重に四邊を眺めしと云ふ。之はチエルシアに在りし時の學友の一人が、一千八百四十年、ブリチツシエ、エンド、フオーレイン、レピウに公にせる所のものなり。

アーサーと其の兄、ウエレスレー侯とは、其の少年時代の大部分は、ノース、ウエルス、ブライキナルトに於て送れり。

一千七百八十一年、父を喪ひ、専ら母の指導の下に在りしか、遂に、イートンの學校に送られたり。然れども、此の校は、彼をして、後來大に回想せしむべき程の紀念をも止めざりき。

其の校に在るや、傳ふる所によれば、彼は、爽快活潑なる兒童なりしが、時には、躊躇し、沈思することもありきと云ふ。而して、當時其の學友に、ポーブス、スミス（牧師シドネイ、スミスの兄弟）なるもの、性癖怒り易かりしか、後來アーサーの戦て勝を制する毎に、ポーブス乃チ曰く「予は、ウエルリントン公の第一の戦勝者なり。何となれば、或日イートンに於て、アーサー、ウエ

レスレーと予と鬪ふや、彼は痛く予を撃ちたればなり云々」と。

アーサーのイートンに在るや、其の地最上の旅宿の一なるランガチアン夫人の許に宿せしか、彼の途に父と呼ぶるゝに至れる頃、一日、其の子、ドーア等兄弟を拉して、此の家を訪ひ、寢室より巡覽しつゝ、數々問を發し、降つて厨に至り、遂に彼等に指點せり。

唯見る、厨房の戸に歴然其の名の讀まるゝものあるを。之れ嘗て、其の彫る所なり。

其の此の事あるや、間もなく、此の興味多き記録は他に移され、旅舎は修繕せられしが、前日訪問せし一人の公は、其の消失によりて、稍愛色あるを見たり。

アーサーのイートンより轉するや、先づブライ

トンの私立教育所に入りしか、後、佛蘭西に於て曠々の名ある、アングアの兵學校に入りぬ、此の校に於て、此の少年學生は、未だ著大なる名聲を残すに至らざりしか、其の豊富なる蘊蓄をなしたるは、蓋し疑ふべからざるなり。

契約期満ちて、彼はイングラントに歸りしか、兎も角も之は、モーニングトン夫人の望まざる所にして、殆んど怒りを以て叫ぶらく、「妾は妾かの子アーサーが、遂に碌々の兒なるを信ず」と。

斯くて、暫時ありしか、其の長兄は、彼の期待に對して無情ならざりき、如何となれば、吾人は其に付て、トリムの紳士の所有せる、書狀によりて、一の證據を有すればなり。其の書に徴すれば、ロード、ウエスレーが、副將と或利益を以て、其の弟、アーサーを採用せんことを約し、竟に二

ケ年を経過せしか、好機會なかりし爲、履行せられさりしことを表せり。然れとも、竟に、一千七百八十七年五月アーサー、ウエレスレー十七歳を以て、歩兵第七十三聯隊の旗手として採用せられき。アーサー、此に於て、心潜かに建業を期せり。其の後ピアの家に於て人に語りて曰く、「予は其の位地に罷勉にして、以て自から高めたり」と。公の少年時代の梗概は斯くて將に終らんとす。而して、統轄せる彼の軍務、及び半世紀以上の、其の國に於ける公生涯——軍隊に於けるが如く其の外交官の位地と、會議に於ける——はブリテンの歴史に於て、之と相駢馳すべきもの、果して幾人かある。其の公の文書を關するものは必ずや、教育に於て、公の規事正しく陶冶せられたることの、最も明白なる憑據を認むるを得ん、

蓋し何者も、嘗て、他に之より温和にして明晰なるものあり得べきを知らざるなり。

之等の事實を綜合するに當りて、吾人は此の公より、果して、如何に巨大なる教訓を受くべきか唯之れ、彼か幼時より出精して陶冶せし、習慣の徳に歸せずんばあらざるなり。—— 詳言すれば早き發達と、直截明確なる注意——其の撓まざる勤勉と、無用の言をなさざる沈靜は、遂に此の大器をなせるなり。

又彼の幼時よりの、正確なる習慣は、次の傳説によりて愉快に表明せらる。

ニュー、ロンドン橋の機關師か、翌朝某時に面晤せんとの公の請求を許諾するに當りて、「予は明朝五時に於て、正しく時間を守る様注意すべし。」と云ふや、公は全く笑を以て答ふらく。「時前十五

分に云へ。予は常に、總て斯くせんと期する毎に  
時前十五分、必ず之か準備を完成せり。而して、  
予は兒童の間、之を科業として學べり」と。

公の生涯の無上の原則とせるものは、眞實に對  
する敬意なり。之は常に、自からこれを賞揚する  
と共に、熱心に注意せし所にして、又他の者等に  
認めし所なり。

乃ち知る。吾人の徳と稱し、道と呼ぶ所のもの  
に對する最上の服従は、其の實行に在ることを。

割十二ヶ月 (きざせらぎ)

石井泰次郎

二月の料理には、梅花にゆかり有るを以て第一  
とすべきか、日次記事に當月廿五日の條下(神  
事)菅神正當忌日云々 (上略) 號三菜種御供

物上挿三黄菜花二故云レ爾或依レ歲而菜花未レ開則  
挿三梅花一と見えたり

◎煮梅の拵方 是は煮梅干と云ふべきを略して煮  
梅とのみいふなり

梅干の品能き大きなるを撰み(一個の目方五匁余  
ほど)湯の煮え立かゝれる鍋に入れて、初十五分

間湯煮して、其湯をすて、別の湯を鍋に入れて、  
又十五分間湯煮すべし、かくて又十五分間して、

湯をかへ、又十五分間湯煮すべし、以上一時間と  
なるなり、扱湯をすて、別のせともの、器に入

れて、酒と砂糖の煮かへしたるをかけて、一夜潰  
かきて翌日用ふるなり

◎酒一合を鍋に入れて煮かへし、又砂糖をとかし  
たるを一合(砂糖は百匁を一合の水にて煮とかす

なり是とかしたるを一合用ふ)二品を合せて煮立